

U15アンダーカテゴリー部会 全国部会長会議 資料

2018/11/4

技術委員会副委員長
ユース育成部会長・アンダーカテゴリー副部会長

山本 明

1. 育成改革の 目的・目標の再確認

1. 発掘

2. 育成

3. 指導者教育

4. 大会整備

5. リーグ戦準備

ユース育成組織：
都道府県育成センター

アンダーカテゴリー部会：
都道府県リーグ戦準備
都道府県協会主催大会準備

2018 JBA

JBAユース育成・PBAユース育成組織体制

2018/7/8

2018

JBAユース育成部会										
部会長：山本 明										
U12JBA			U15JBA			U18JBA				
コーチ		ブロックユース育成マネージャー	コーチ		ブロックユース育成マネージャー	コーチ		ブロックユース育成マネージャー		
男子	女子		男子	女子		男子	女子			
北海道	〇〇〇	△△△	□□□	〇〇〇	△△△	□□□	〇〇〇	△△△	□□□	JBA任命
・										JBA任命
九州										JBA任命

今後はU12,U14,U16となる

JBAカテゴリー別運営担当								
部会長：吉田長寿								
U12部会			U15部会			U18部会		
U12部会長			U15部会長			U18部会長		
ミニ連盟	ユース育成M	中体連	中学生連盟	クラブ/Bクラブ	ユース育成M	高体連	クラブ	ユース育成M

2018

ユース育成委員会										
委員長：PBAユース育成マネージャー●●●●										
U12PBA			U15PBA			U18PBA				
コーチ		マネージャー	コーチ		マネージャー	コーチ		マネージャー		
男子	女子		男子	女子		男子	女子			
県	〇〇〇	△△△	□□□	〇〇〇	△△△	□□□	〇〇〇	△△△	□□□	PBA任命
地区A										PBA任命
地区B										PBA任命
地区C										PBA任命

2018年4月または6月にPBAにてこの組織体制を開始してもらう様に要請する
 事業運営担当部門は現状のユース育成組織を移行させる
 今後はU12,U14,U16となる

PBAカテゴリー別運営担当								
組織長：〇〇〇								
U12部会			U15部会			U18部会		
U12部会長			U15部会長			U18部会長		
ミニ連盟	ユース育成M	中体連	中学生連盟	クラブ/Bクラブ	ユース育成M	高体連	クラブ	ユース育成M

2018年4月または6月にPBAにて上記組織体制開始を要請する
 PBAにおける競技会(大会)運営等を担当する
 この図では表現しきれないが各部会内に総務・財務・広報・その他をおく予定

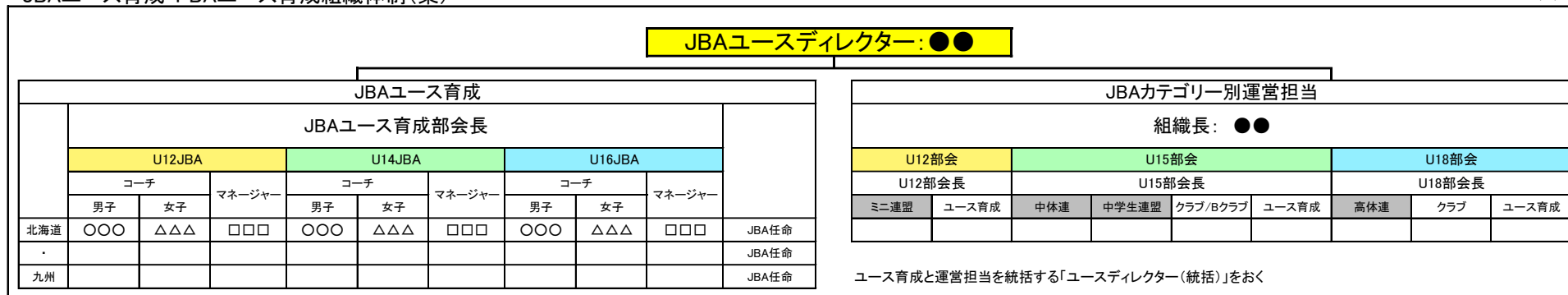
2018 都道府県(PBA)

2019-20 JBA

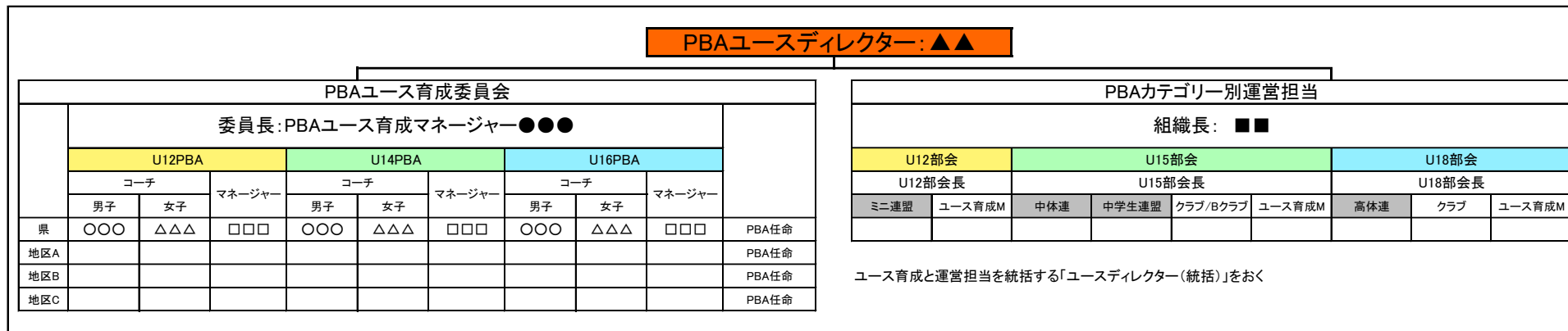
JBAユース育成・PBAユース育成組織体制(案)

2018/7/8

2019-20



2021



2020-21 都道府県(PBA)

U15世代の育成の仕組み（これまで→これから）

発掘・育成

U15世代のバスケット環境改編

これまで		これから
U13ブロック・U14トップ・Jrオールスター・U15トップ	→	都道府県DC・トライアウト・U13/U14/U15ナショナルDC リーグ戦化・U15選手権
<p>■ジュニアオールスター 中2, 中1県・地区選抜→最終12名 「勝つためのチーム作り」≠将来性考慮 U14/U15トップへ繋がっていた</p> <p>■U13ブロック 県5名→ブロック→トップへ 2016年よりU13/U14ナショナル育成キャンプ30名</p> <p>□問題点 女子の発掘は早熟であり中学世代で合う 男子の発掘は中学世代ではあまり合わない</p>	発掘	<p>■都道府県育成センターの設置 県育成20名、地区育成20名×地区数＝広く多く発掘 県DC→ブロックDC→トライアウト→ナショナルDC (2018)</p> <p>■U15選手権、BリーグU15大会 中学3年生の活動時期の延長 有望選手の活躍の場</p>
<p>■U13ブロック・U14/U15トップエンデバー 年1回の事業、都道府県エンデバーは伝達が主。 継続的/計画的な育成事業は都道府県単位では行っていない。</p> <p>■クラブチームはほとんどなし ほとんどの都道府県でクラブチームがなく、全中予選引退後は活動場所がなかった</p> <p>■ジュニアオールスターの活動 勝利を目指すための「チーム作り」が主となるが多かった</p>	育成	<p>■都道府県育成センターの設置 「個の育成」「選手作り」を目標にU12/U14/U16育成センターを設置する。 年代/習熟度を考慮した指導内容を実施する。 将来性・オールラウンダー育成・特化した能力醸成を目指し将来大きく結果を出せるように指導する。</p> <p>■U15選手権の設置 クラブチーム・BリーグU15の登録開始。 部活動を含めた大会の設置。中3引退時期の延長。</p>

U15世代の育成の仕組み（これまで→これから）

指導者育成・大会整備

U15世代のバスケット環境改編		
これまで		これから
U13ブロック・U14トップ・Jrオールスター・U15トップ	→	都道府県DC・トライアウト・U13/U14/U15ナショナルDC リーグ戦化・U15選手権
<p>■エンデバーによる伝達 ブロック・都道府県エンデバー事業・年1回4時間程度。年代別指導内容の伝達。</p> <p>■ジュニアオールスター 関わったスタッフの指導者経験値を高めていた</p>	指導者教育	<p>■都道府県育成センターの設置 年間10回目標、ジャパンスウェイを考慮しながらの指導内容の実践。 地区育成センターの設置により関わる指導者数が多くなる。 U16までに学んで欲しい内容を実践を伴いながら理解してもらう。 指導内容はJBAよりホームページを利用しながら随時更新していく。</p>
<p>■ジュニアオールスター 都道府県選抜による対抗戦</p> <p>■全中 都道府県～ブロック大会を勝ち上がった部活大会。 中体連・JBA主催。</p> <p>■BリーグU15大会(2016年度-)（男子のみ） チャンピオンシップ、チャレンジカップ、フレンドリーBリーグ主催。</p>	大会	<p>■U15選手権 都道府県代表、部活・クラブ・Bユース。 JBA主催。</p> <p>■全中 都道府県～ブロック大会を勝ち上がった部活大会。 中体連・JBA主催。</p> <p>■BリーグU15大会（男子のみ） チャンピオンシップ、チャレンジカップ Bリーグ主催。</p>

普及

U15世代のバスケット環境改編		
これまで		これから
<p>■ジュニアオールスター 憧れ目標とする選手もいる。地区からの練習会に参加するためにJBA登録をしている。</p>	普及	<p>■都道府県育成センターの設置 県選抜・地区選抜のステイタスの保持。 「選手作り」を進めることでバスケットボールが上手になる楽しさ、指導者にも教える楽しさを感じてもらう。</p> <p>■リーグ戦化 リーグ戦化で登録したチームに公式戦試合数の保障、複数チーム登録可能による補欠の解消。 中3引退時期の延長。 部活・クラブ・Bユースが参加できる大会により裾野の拡大</p>

将来を見据えた指導

指導者教育が全てにおいて重要

■ 育成コーチングの目的/考え方

- ・選手を作る
- ・選手を育てる
- ・可能性を信じてプレータイムを与える

■ マンツーマン推進

- ・将来成長する土台を作るためにマンツーマンを学ばせる
- ・勝利至上主義に指導者が引きづられない

■ リーグ戦

- ・普及的観点で試合環境を整える：補欠文化改善（複数チーム登録）
- ・拮抗したゲーム環境
- ・長期リーグ戦で日常にゲームがあること（練習～試合～練習）

■ 育成センター

- ・個の育成を目指す
- ・成長スピードを高める
- ・勝利を得るための戦術指導ではなく学ぶべき指導内容を習得させる
- ・指導者も習熟度別内容を学ぶ
- ・タレントスカウティングの考え方を実践：選手を見抜く力を養う

今後は都道府県単位での活動に重点がおかれる。

JBAは都道府県における皆様の活動を支援していく。

都道府県毎に事情が異なる。

だからこそ都道府県毎に課題解決に取り組む必要がある。

ボランティアである以上、都道府県の実情に合わせ、無理のない範囲で、しかし、日本バスケットを成長させるために、積極的に取り組んで頂く事を望む。

育成普及における成果とは？

1. 選手が将来大きく成長するための土台を作ること（育成）
2. 選手がバスケットボールをすることを楽しいと思えること（育成）
3. 将来の代表が世界基準で戦えるようになること（育成→強化）
4. 日本のバスケットボール界が活性化していること（普及）
5. 多くの選手がバスケットボールを行う様になること（普及）
6. バスケットボールに関わる方々が幸せに元気でいられること（理念）

2. リーグ戦制度

■経緯

- ・ガバナンス改革：都道府県法人化、登録料徴収一元化＝登録者に試合をする権利を付与
- ・普及的観点：全ての登録者にゲーム環境を整備
- ・強化的観点：強化リーグの整備

■環境変化

- ・クラブ・BクラブU15の登録開始
- ・登録移籍の課題

■目的

- ・試合環境を整える（普及的観点）：登録者に試合環境を整備（補欠文化解消）
- ・能力別のゲーム環境により拮抗したゲームを増やす（育成的観点でも成長スピード向上）
- ・長期リーグ戦で日常にゲームがある（練習～試合～練習のサイクル）

リーグ戦文化はリーグ形式でなく日常に試合をおくことが狙い

1. リーグ形式を取り入れたが、短期集中で行う例＝目指すべき文化ではない

	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日												
×																																																						
						●●	●●						△△								△△																																	
						●●	●●						△△								◎◎	◎◎																																
						●●	●●						△△								◎◎	◎◎																																

2. リーグ戦が長期に展開され、練習～試合～練習の文化を取り入れる。育成センター事業が月に1回。トーナメント戦をはさんでリーグ戦継続。

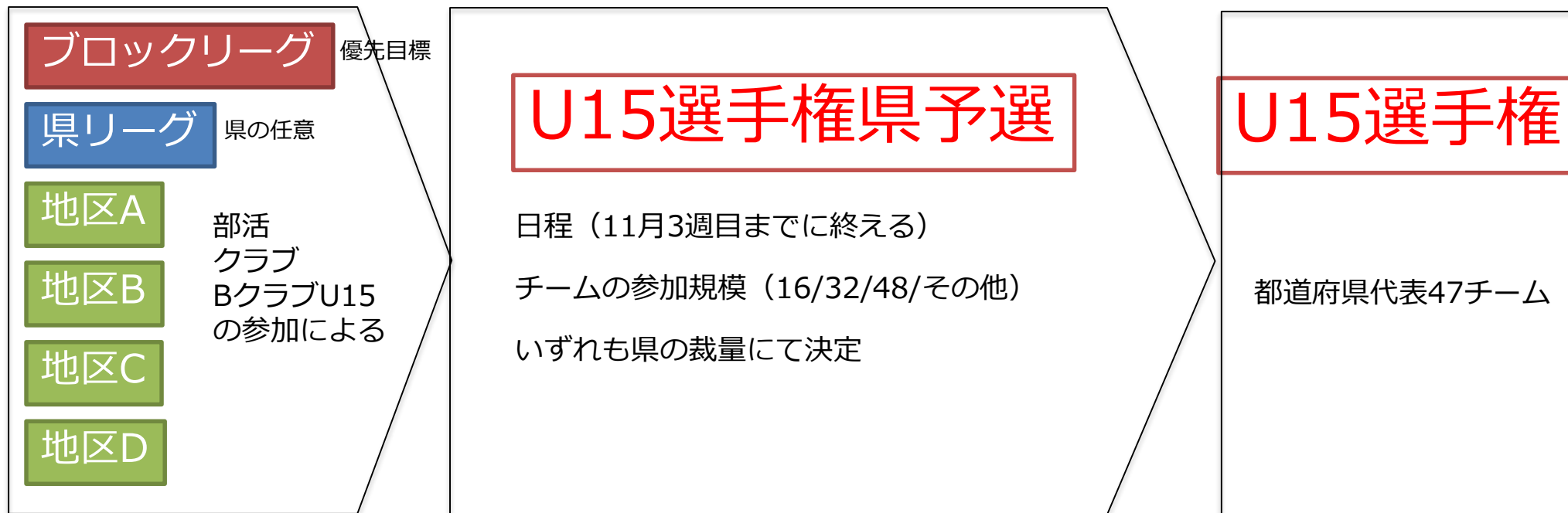
	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日																							
○						△△							△△								△△											△△								△△								△△								△△								△△	
						●●							●●								●●											●●								●●								●●																	
						△△							△△								◎◎	◎◎										◎◎	◎◎							◎◎	◎◎							◎◎	◎◎																
							●●							●●								◎◎	◎◎									◎◎	◎◎							◎◎	◎◎							◎◎	◎◎																

3. リーグ戦の発展系。リーグ試合数が多くあり、練習試合をする必要もない。

	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日																
◎																																																										
						●●							●●								●●											●●								●●								●●										
						●●							●●								◎◎	◎◎										◎◎	◎◎							◎◎	◎◎							◎◎	◎◎									
							●●							●●								◎◎	◎◎									◎◎	◎◎							◎◎	◎◎							◎◎	◎◎									

- リーグ戦
- ◎ トーナメント戦
- △ 練習試合
- 休日
- 育成センター実施日

1→2→3のリーグ戦文化導入→発展を目指す。県リーグ、U15/U18ブロックリーグ発展を視野に入れる。



■ リーグ戦の狙い（守るべき必須項目）

リーグ形式でなく、**長期的に試合がある**ことが必要
→ **日常**にゲームがある→**練習～ゲーム～練習のサイクル**
育成世代は**試合経験**をさせることが育成となる
→ 育成世代には誰にも可能性があると考えるべき
拮抗した試合をするために**能力別**に分けるのが理想

■ 都道府県における県予選の在り方（守るべき必須項目）

県・地区リーグには部活・クラブ・BユースU15が参加
もしくは部活・クラブ・Bクラブ別で別途リーグ戦がある（？）
各リーグもしくは各地区リーグ上位が県予選に出場
県予選トーナメントを戦って県代表1チームを決める
日程と参加規模を勘案して県予選形式を都道府県裁量で決定

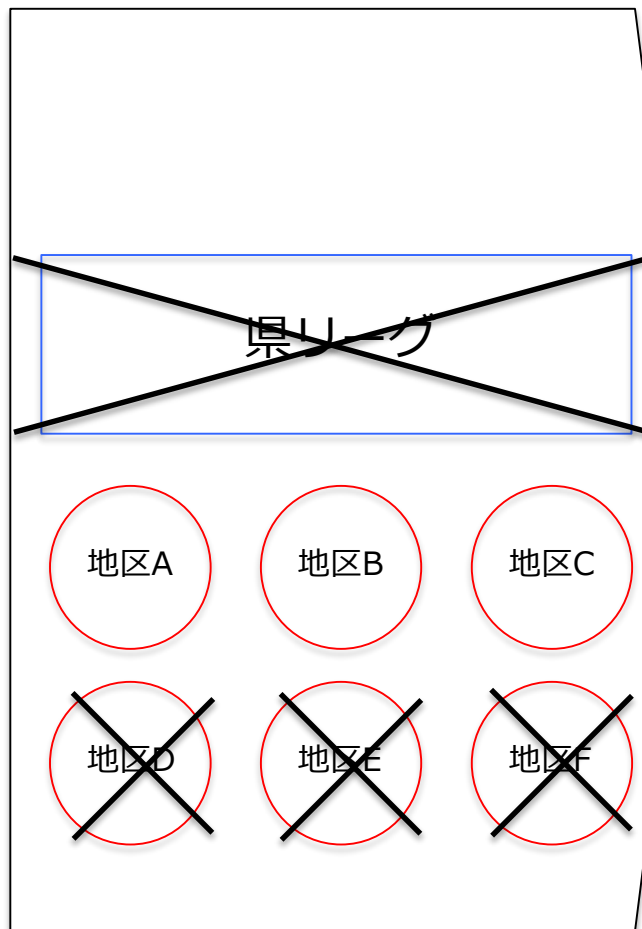
■ 県におけるリーグの在り方の違い（どの在り方でも良い）

1. 県リーグがない
→ 各地区リーグの上位●チームが県予選出場
2. 県リーグがある
→ 県リーグ参加チーム+2部または地区リーグ上位●チームが県予選出場
3. ブロックリーグがある
→ ブロックリーグに参加しているチームは県予選に参加できる
→ 残りの枠数を上記（1）（2）の考え方に沿って決定する

将来的にこの形を目指したい

■ 県リーグに参加しない強豪（検討項目）

県リーグに参加することが成長にならない
例) 全中に参加したチームは県リーグ参加せずとも
県予選に参加できるなどの移行処置
ブロックリーグが整備できれば解消できるのでは？



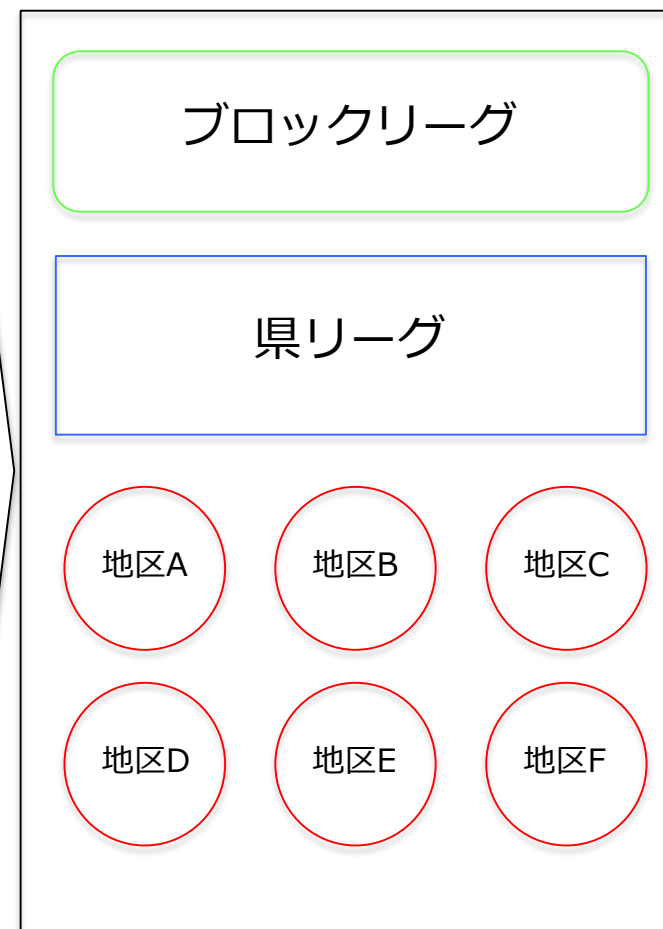
一次目標：リーグ戦導入

2019:U15
2020:U12/U18



二次目標：上位リーグ整備

2022:U15
2023:U12/U18

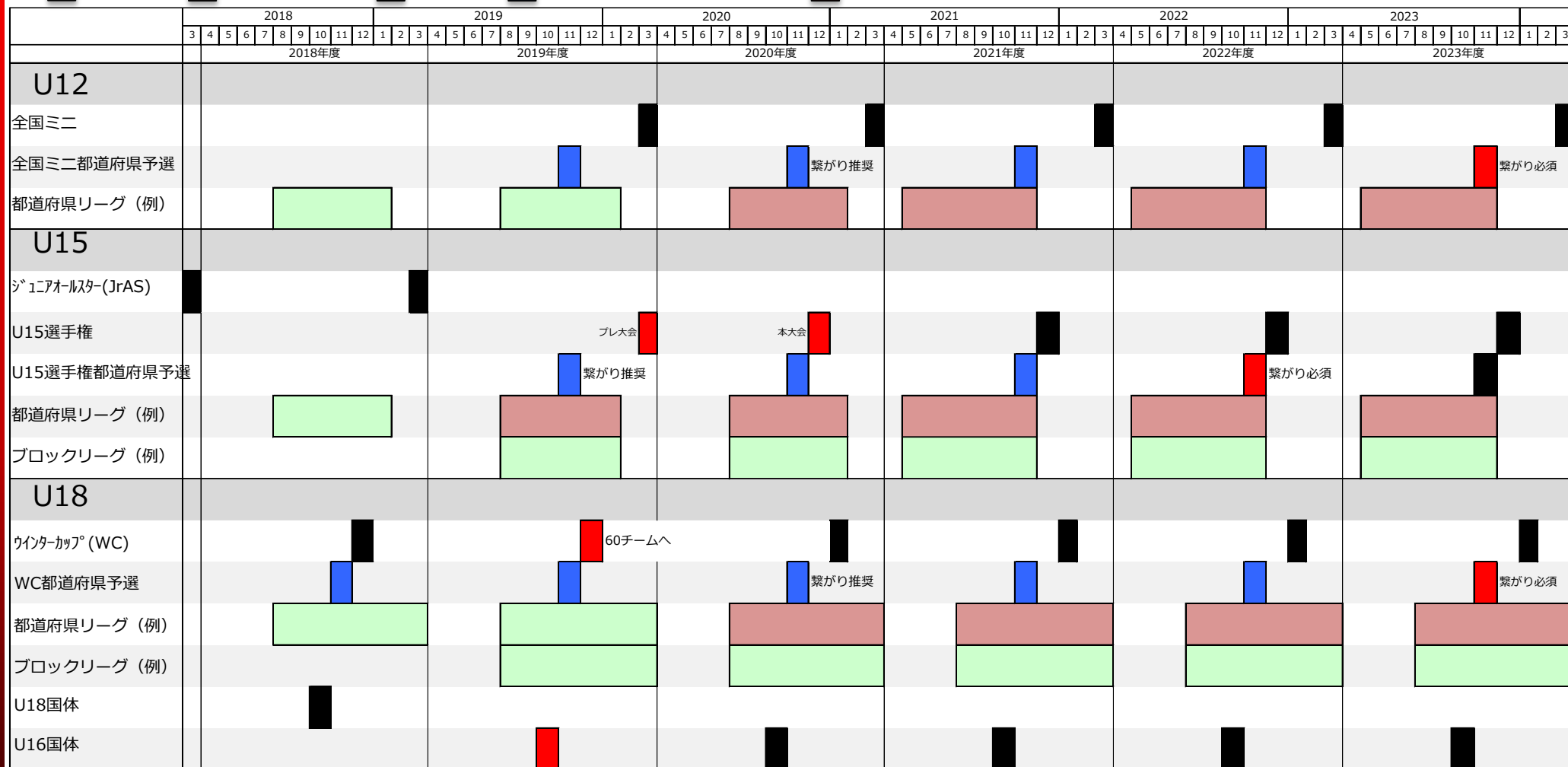


三次目標：最上位リーグ整備

2024:U15
2025:U18

リーグ戦・県予選の関連

■ 推奨
 ■ 必須目標
 ■ 大会
 ■ 都道府県予選大会
 ■ 新規設置大会



- リーグ戦化設置目標 2019年度 U15 2020年度 U12/U18
- 県予選とリーグ戦繋がり必須目標 2022年度 U15 2023年度 U12/U18
- 県リーグ整備目標 2022年度 U15 2023年度 U12/U18
- ブロックリーグ整備目標 2024年度 U15 2025年度 U18

- 実施可能なブロックから実施していただきたい
- 実施に当たっては、事前承認を競技会申請と同様にJBAに行うこと
- 運営者及び費用負担はJBA主体では現状ではできない
- 大会実施委員会などの組織を立ち上げることにより運営を行っていただく

- 当初は県リーグを経由しない形でも良い
- 移行期を経て（2～3年）
- 県リーグの勝者（複数チーム）がブロックリーグへ参加する形を目指す

（2024年度設置目標）

ブロックリーグ実施例：男子30、女子30チーム参加の場合（2017●●ジュニアバスケットボールリーグ戦より）

<収入>		<支出>	
項目・内訳	金額	項目・内訳	金額
チーム参加費		体育館使用料	1,021,060
90000円×60チーム	5,400,000	人件費	
大会Tシャツ収益		事務局	1,500,000
500円×300枚	150,000	会場責任者（9300円×28会場）	260,400
合計	5,550,000	審判費用	1,740,000
		3000円×2人×290試合	
		HP管理費	140,000
		雑費	
		パンフレット	142,500
		表彰（トロフィー・賞状・賞品）	65,000
		印刷・事務用品代	20,000
		スコアシート	14,690
		合計	4,903,650

審判費用はライセンスランクに関係なく一律計上。
 日程：7月下旬～11月末
 クラブとしての全国大会出場チーム男女各8チーム
 延べ28会場/68面分/408試合（1面6試合）確保
 大学体育館4回使用

1. 都道府県にU12/U15/U18カテゴリー別にリーグ戦を設置する
2. U15選手権予選と都道府県リーグ戦の繋がり必須化はU15では2022年度を目標とする
3. 当面はリーグ戦が直接的（出場校決定大会）にU15選手権予選にならないこと
4. 試合数は年間10試合以上とする
5. リーグ編成の方法は都道府県の実情に合わせて決定して良い
(①前年度成績による ②毎年リーグ編成大会を実施してリーグ編成を決定する など)
6. リーグ開始・終了の日程は以下を勘案の上、都道府県として決定して良い
 - 1) リーグ編成の時期
移籍によりチーム力が大きく変化することを考慮し、大会エントリー受付時期とリーグ編成予選の時期を決定すること
 - 2) 大会エントリー受付後の移籍による同大会エントリーはできない。
7. オフシーズンの設置推奨：ゲームを設定しない期間として推奨する
8. 入替戦の実施は都道府県裁量で決定して良い
9. 複数チームエントリーを認める
「補欠をなくす」「指導者を増やす」ことを意識し、リーグ戦の目的である「登録競技者に試合数を保障する」「能力別により拮抗したゲームを増やす」ことを達成する

- 年度末に次年度実施計画書・実施要項を提出する（期限：2月末日）
- 年度終了後に前年度実施報告書を提出する（期限：4月末日）

	リーグ戦	育成センター
10月	次年度Dファンド申請締め切り（期限：末日）	次年度Dファンド申請締め切り（期限：末日）
12月		
2月	次年度実施計画書・実施要項提出（期限：末日）	次年度実施計画書・実施要項提出（期限：末日）
3月		次年度育成センター実施伝達講習会（予定）
4月	前年度実施報告書提出（期限：末日）	前年度実施報告書提出（期限：末日）
10月	次年度Dファンド申請締め切り（期限：末日）	次年度Dファンド申請締め切り（期限：末日）
12月		
2月	次年度実施計画書・実施要項提出（期限：末日）	次年度実施計画書・実施要項提出（期限：末日）
3月		次年度育成センター実施伝達講習会（予定）
4月	前年度実施報告書提出（期限：末日）	前年度実施報告書提出（期限：末日）

働き方改革・運動部活動ガイドライン・JBAのスタンス

- ・働き方改革の一環として、運動部活動ガイドラインが発表され、活動時間制限（16時間/週）休養日設定（土日のどちらか、平日1日の週休2日）が示された。
- ・JBAとしては学校教育活動と切り離れた「社会教育活動」として捉えている。
- ・「意欲のある指導者」「意欲のある選手」のために、競技力向上も鑑み、競技団体は整備していく必要がある。
- ・「意欲のある選手」「意欲のない先生」への支援も必要との声がある。外部指導員、部活動支援体制の検討。

資料はJBAHPに掲載

事業実施への校長会の理解のために

- ・社会教育活動実施のために、会場確保が必要。
- ・社会教育活動と行政が理解を示し、活動を認めている自治体（校長）とそうでない自治体（校長）が存在。
- ・自治体の問題か、校長会の問題か。校長個人の問題か。
- ・うまくやっている都道府県はどのように対処しているのか。管理責任範囲。管轄。

3. 育成センター

■目的

- ・ 個の育成 「選手作り」
- ・ 成長スピードを速める
- ・ 勝利至上の戦術指導ではなく、習熟度別、段階別を考慮した指導を行う
- ・ 指導者は育成世代の指導内容への理解を深める
- ・ 育成世代コーチングを実践する
- ・ タレントスカウティングの力を向上させる

■タレントスカウティング(選手発掘)

- ・ 今回のU13・U18ブロックDCでの方法論伝達 = 都道府県育成センターで活用
 - フィジカルテスト (スプリント・ジャンプカ等バスケットボール特性)
 - バスケットボールスキルテスト (シューティング、パッシング、ドリブル、フットワーク等)
 - バスケットボールIQ (戦術を指導し、表現力・理解力を見る)
 - メンタル特性 (リーダーシップ、積極性、闘争心、ディフェンスへの意識等)

育成センター機能 育成事業と代表活動の連携

2018/6/4(10/29修正案)

将来構想WG（育成センター）

育成センター機能

発掘

- ・早熟と晩熟、技術と経験年数、将来予測身長、運動能力、運動学習能力を考慮。
- ・都道府県からナショナルトライアウトに推薦できる選手を見つける（責任者は都道府県ユースコーチ及びユースダイレクター）。
- ・県からの推薦を受けてユースダイレクター（仮称）によるチェックがあり、最終選考会議へ推薦。
- ・ナショナルトライアウトは原則60名以内で実施する。

育成

- ・「選手を作る」
- ・LTAD育成方針に沿い、4つのフェーズのどこに位置するか考慮
- ・各年代毎の特徴を考慮
- ・強化モデル、一貫指導を考慮
- ・育成センター指導内容を参考に
- ・育成コーチングの実践
- ・習熟度別指導を実践

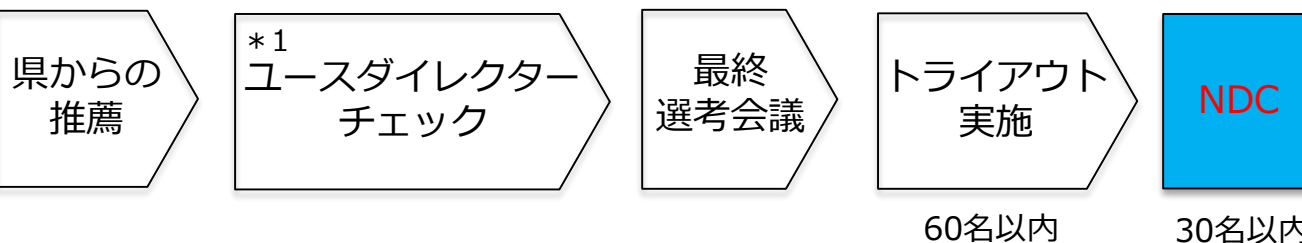
指導者教育

- ・LTADの理解を深める。
- ・バスケットボール構造、練習計画をより深く学ぶ。
- ・指導実践を通じて育成コーチング(HOW)、習熟度別指導内容(WHAT)を検討する機会
- ・関わる指導者全体で何が最善かを検討する機会
- ・育成年代のフィロソフィ、トレーニング、コーチングスキル、保護者対応などを学ぶ。

普及

- ・できる限り県・地区・市町村レベルに浸透させる。
- ・選考されることでのステイタス。
- ・保護者教育

U13/U14/U15における選手発掘の流れ（2019以降）



NDCにはこの道の他、強化コーチの推薦による道もある。

*1 ユースダイレクターは新規設置を検討中。
役割は都道府県にとどまらず指定されたエリアの選手の発掘、指導内容の伝達、組織整備のチェック等。
発掘において選手選考方針の下、都道府県・ブロック格差を調整する。
2018年度はブロックユース育成コーチがブロック内選考責任者。

育成センター事業 → 代表活動 (2018 : FIBA U18Asia U17World)

	2018												2019			
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	
U12	PDC 任意		B D C	B D C	B D C	B D C			B D C		B D C					
U13						ト ライ ア ウ ト	N D C				B D C			(2021 U16代表)		
U14	PDC 任意					ト ライ ア ウ ト	N D C ①	N D C ②	N D C ③	(2022 U18代表)				オ ジ ユ ニ ア ス タ		
U15						選 考 会 議	2019 U16代表合宿 →									
U16	PDC 任意											B D C		2020 U18代表選考		
U17					世 界 女 子 F I B A							B D C		2020 U18代表選考		
U18					ア ジ ア 男 F I B A	日 韓 中			ア ジ ア 女 F I B A	2019 U19代表合宿 →						

育成センター伝達講習会

育成センター事業 → 代表活動 (2019 : FIBA U16Asia U19World)

	2019												2020			
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	
U12	PDC 必須												BDC 実施するかどうか2018年度検討			
U13	PDC 任意												実施するかどうか2018年度検討 (2024 U18代表)			
U14	PDC 必須												(2021 U16代表)			
U15	PDC 任意												(2022 U18代表)			
U16	PDC 必須												2019 U16代表合宿 → FIBAアジア 国体 2020 U17代表合宿 →			
U17	2020 U18代表合宿 →												日韓中 →			
U18																

育成センター伝達講習会

BDC

トライアウト

トライアウト

U15
プレ大会

NDC ①

NDC ②

NDC ③

トライアウト

NDC ①

NDC ②

NDC ③

育成センター事業 → 代表活動 (2020 : FIBA U18Asia U17World)

	2020												2021							
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6					
U12	育成センター伝達講習会												PDC 必須				BDC 実施するかどうか2018年度検討			
U13													PDC 任意				実施するかどうか2018年度検討 (2023 U16代表)			
U14	PDC 必須				(2024 U18代表)				トライアウト		NDC ①		NDC ②		NDC ③		NTC以外の拠点を探る			
U15	PDC 任意				選考会議				2021 U16代表合宿		U15 本大会		→							
U16	PDC 必須				国体				(2022 U18代表選考)											
U17	2020 U17代表合宿 →												世界 FIBA A							
U18	2020 U18代表合宿 →												アジア FIBA A				日韓中			

育成センター事業の将来像

2018/5/22（10/29修正）

ユース育成部会資料

育成においては以下の4つの機能が必要

発掘

育成

指導者教育

普及

2002年よりエンデバー事業設置

U12/U13/U18ブロックエンデバー

U14/U15/U18トップエンデバー

2016年よりナショナル育成キャンプ設置

U18は強化代表へ移行、U12/U13/U14/U15

(U12は2018より休止)

発掘の問題点

人数多：力のない選手も選出されている（普及との混在）＝経費大

推薦枠：力のある選手の取りこぼし＋力のない選手の選出

時間少：1泊2日で伝達と発掘の両方を行うのは難しい

方法論：中学世代男子では早熟発掘が多く将来に繋がりにくい

育成の問題点

継続性：継続的な刺激が必要だがブロックエンデバーは年1回の事業

実施度：都道府県育成はJrオールスター、国体強化。県による温度差。

目的異：Jrオールスター・国体準備で行うとチーム強化が強調される傾向

指導者教育（伝達）の問題点

時間少：年1回のブロックエンデバーで伝えられることは限定的（約4時間）

指針要：育成年代に何が必要かの指針が全体像として不足

周知法：指導内容資料が関係者で止まりがちで多くの指導者に届きにくい

普及の問題点

県から選抜されることのステイタスのプラス・マイナス

バスケット界へ選手を取り込むことに貢献できているか？

資源（資金・人）は限りがある
限りある資源を効果のあるところに集中的に投下して成果を上げなければならない

育成における成果とは？

1. 選手が将来大きく成長するための土台を作ること
2. 選手がバスケットボールをすることを楽しいと思えること
3. 将来の代表が世界基準で戦えるようになること
4. 日本のバスケットボール界が活性化していること
5. バスケットボールに関わる方々が幸せに元気でいられること
6. 多くの選手がバスケットボールを行う様になること

成果を上げるための事業を実行することを前提に提案

2018年度よりエンデバー事業を「育成センター(Development Center)事業」と名称変更する
都道府県育成センターが育成活動の中心となる
各年代の将来有望選手候補育成をナショナル育成センターにて実施する
2019年度以降、経費を都道府県DC (D-fund)、ナショナルDCにより多く充当する(ブロックDCをなくす)

発掘方法論

複数回の都道府県育成センター活動により、数回のトライアウトを経てより有望な選手の発掘
都道府県内の有望選手の情報収集をより密に行う
早熟発掘と晩熟発掘を理解し、男女の差異に留意しながら選手を選出するこれまでと異なる方法論
県推薦枠は廃止、力のある基準を満たす選手を発掘しナショナル育成センタートライアウトに推薦
都道府県DC→ナショナルDCトライアウト→ナショナルDC(ブロックDCの廃止)
都道府県格差を埋めるために発掘担当の人材を任命

育成方法論

目標年10回、月1回の複数回実施により、選手に刺激を与え、意識を持たせる
チーム作りではなく、選手作りを目標とする育成コーチングの周知徹底
オールラウンダー育成+特化した能力のより向上を目指すコーチング

指導者教育(伝達)方法論

「どのように指導すべきか」を理解してもらうための育成コーチング資料準備
「何を指導すべきか」育成世代に必要な指導内容を理解してもらうための習熟度別資料準備
都道府県育成センター活動を通じて指導者間で何が必要となるのかを検討する機会を持つ

普及方法論

他県交流戦を各都道府県裁量で実施して頂くことを推奨
地区育成センターの実施によってより多くの候補選手に目指すものを伝えていく

育成センター	U12/U11		U14/U13		U16/U15	
	2018	2019-	2018	2019-	2018	2019-
都道府県	○	◎U12	○	◎U14	○	◎U16
ブロック	◎	◎U12	◎U13	×	◎U16/U17	×
ナショナル	×	×	◎U13/U14	◎U14 △U13	×U16代表	◎U15

◎：重点実施 ○：推奨 △：検討中 ×：実施せず

ブロック事業の考え方・U12/U13発掘事業

1. 発掘機能を再検証した結果、ナショナルに繋がる選手はもっとシビアに選考しなければならない。都道府県育成センターにてナショナルに推薦できる選手基準にて厳格に判定し、ブロック育成センターを実施しなくとも選考する方法論とする。
2. ブロック育成センターの経費を都道府県育成センター（D-fundにて47都道府県に補助）、及びナショナル育成センターに充てる。
3. ブロック育成センター（旧ブロックエンデバー）が担っていた「伝達」の役割は直接都道府県育成センターにて行う。「ブロック間交流」の役割は各都道府県育成センターの延長として、都道府県裁量により別途機会を設けて補っていただく。
4. U12・U13はナショナル育成センターに選抜するには身長が未発達の時期であり、代表候補確定が難しいことから、都道府県発掘にて有望選手をリストアップし、U13・U14都道府県育成へ情報を伝達することを目標とする。

都道府県育成センター

発掘・育成・指導者教育を都道府県の裁量にて活性化させていく。
JBAは指導内容・指導者教育・発掘方法論・育成方法論などに関する情報提供を積極的に行って支援する。
他県との交流（ブロック内交流戦実施等）を都道府県育成センターの一環（延長）として位置づける。

ナショナル育成センター

U14/U15ナショナル育成センターはトップ選手の目標
(U13ナショナル育成センターは2019年度検討中)
U14以上での海外交流を検討
U16・U18・A代表への選出確率を高める（経験値を代表に活かす）

ブロック育成センター

2019年度U12ブロック育成センターを実施